

追悼

有馬 朗人 先生を偲んで



● ご略歴

1930(昭和5)年9月13日 大阪市に誕生 静岡県立浜松第一中学(現・浜松北高校)、旧制武蔵高等学校卒業
1953(昭和28)年3月 東京大学理学部物理学科卒業
1956(昭和31)年4月 東京大学原子核研究所助手
1958(昭和33)年8月 理学博士
1959(昭和34)年9月 アメリカ国立アルゴンヌ研究所研究員
1960(昭和35)年9月 東京大学理学部講師
1964(昭和39)年8月 東京大学理学部助教授
1967(昭和42)年9月 ニュージャージー州ラトガース大学客員教授
1971(昭和46)年1月 ニューヨーク州立大学ストニーブルック校教授
1975(昭和50)年6月 東京大学理学部教授
1981(昭和56)年4月 東京大学大型計算機センター長
1985(昭和60)年4月 東京大学理学部長
1987(昭和62)年4月 東京大学総長特別補佐(副学長)
1989(平成元)年4月 東京大学総長(平成5年3月まで)
1993(平成5)年4月 文部省学術顧問(平成6年3月まで)
〃 5月 東京大学名誉教授
〃 10月 理化学研究所理事長(平成10年5月まで)
1998(平成10)年7月 参議院議員(平成16年7月25日まで)
〃 文部大臣(平成11年10月まで)
1999(平成11)年1月 科学技術庁長官兼務(平成11年10月まで)
2000(平成12)年6月 (財)日本科学技術振興財団会長(平成23年4月退任)
2004(平成16)年7月 科学技術館長(平成27年6月まで)
2006(平成18)年4月 学校法人根津育英会武蔵学園長
2010(平成22)年4月 公立大学法人静岡文化芸術大学理事長
2011(平成23)年6月 公益財団法人日本科学技術振興財団理事長(平成24年3月退任)
2020(令和2)年12月6日 永眠

【日本アイソトープ協会関係】

1994(平成6)年5月～1998(平成10)年5月 日本アイソトープ協会理事
2008(平成20)年5月～2020(令和2)年12月 日本アイソトープ協会会長

● 受賞関係

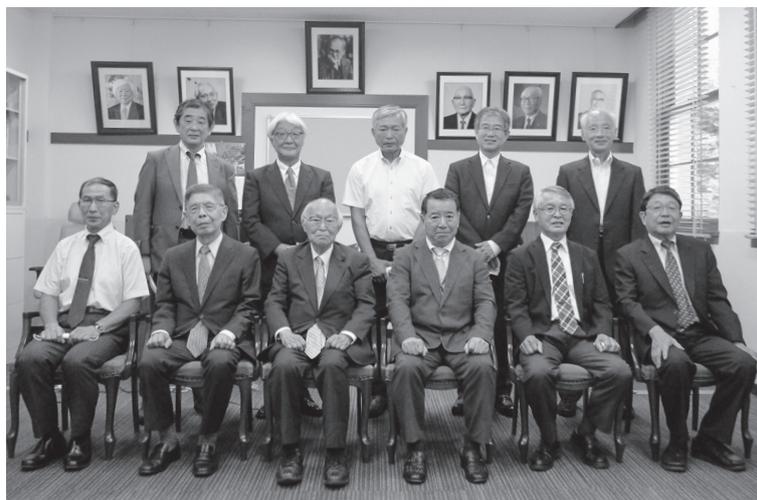
1978(昭和 53)年 12 月	仁科記念賞「原子核の集団運動現象の解明」
1990(平成 2)年 5 月	フランクリン・インステイテュート・ウエザリル・メダル(アメリカ)
1993(平成 5)年 4 月	アメリカ物理学会ボナー賞(日本人初)
6 月	日本学士院賞「原子核の力学的模型と電磁相互作用の理論的研究」
1998(平成 10)年 6 月	レジオン・ドヌール勲章(フランス)
2002(平成 14)年 9 月	名誉大英勲章
2004(平成 16)年 11 月	文化功労者, 旭日大綬章
2010(平成 22)年 11 月	文化勲章
2017(平成 29)年 10 月	名誉都民 等

● 俳句関係

1946(昭和 21)年	ホトトギス初入選(虚子選)
1950(昭和 25)年 5 月	山口青邨門に入る。夏草入会
1953(昭和 28)年 4 月	夏草同人, 子午線創刊に参画
1988(昭和 63)年 2 月	句集「天為」で俳人協会賞
1990(平成 2)年 9 月	「天為」創刊, 主宰
1996(平成 8)年 4 月	国際俳句交流協会会長
1998(平成 10)年 8 月	国際俳句交流協会名誉会長
2007(平成 19)年 5 月	国際俳句交流協会会長(現職)

句集

- 第一句集「母国」(1972 春日書房)
- 第二句集「知命」(1982 牧羊社 夏草賞受賞)
- 第三句集「天為」(1987 富士見書房 俳人協会賞受賞)
- 第四句集「耳順」(1993 角川書店)
- 第五句集「立志」(1998 角川書店)
- 第六句集「不稀」(2004 角川書店)
- 第七句集「分光」(2007 角川書店)
- 第八句集「鵬翼」(2009 ふらんす堂)
- 第九句集「流轉」(2012 角川書店)
- 第十句集「黙示」(2017 角川書店 毎日芸術賞, 蛇笏賞, 俳句四季大賞)



2020年6月 日本アイソトープ協会奨励賞の授賞式にて(前列左から3番目が有馬先生。新旧役員・理事と共に)

有馬朗人先生を偲んで

湘南鎌倉総合病院, 放射線影響協会
佐々木 康人 (Sasaki Yasuhito)

有馬朗人先生の訃報を2020年12月7日のニュース速報で知りました。お元気でご活躍中と信じていたので驚愕しました。12月5日に大越ニュースキャスターの取材を受けておられるお姿が12月20日のNHKスペシャルで放映されました。いつものお元気なお姿とお話を万感の思いで視聴しました。ご遺族のご悲嘆を想い心からお悔やみをお申し上げます。

1990年4月に筆者が医学部放射線科主任に就任した折の第24代東京大学総長が有馬先生でした。前年暮れから東大医学部附属病院RI研究室での放射線管理不行届き問題が世間を騒がせており、その対応に当たりました。全学の問題となっており、各部門の放射線安全管理責任者の会議が頻繁に開催されました。「お医者さんにRIや放射線を扱わせると何をするかわからない」との非難に加えて、適正な放射線管理についてのご教示を受ける機会がたびたびありました。黙って傾聴する長い我慢の時間でした。

ある時医学部長が、「有馬総長が今度来た放射線科教授はどうしているか気にかけておられる。総長が他学部平の教授のことを尋ねるのは異例だ」と筆者に言われました。心配されながら、しっかりやれという激励でもあったと思います。病院外来棟新築お披露目で挨拶された総長は冒頭「くじ引きで総長になった有馬です」と自己紹介されました。前年の総長選は決戦投票でも同数となりくじ引きで決定という異例の選挙であったと聞きました。この時初めて直接ご挨拶する機会を得たのですが、親しみ易い好々爺という感じの印象を受けました。「行動する総長」と呼ばれ、政治家や財界の代表を学内に招かれ、老朽化した東大の施設を実見して貰い、予算獲得に奔走されました。東大再建の指揮を執られたのでした。

筆者が科学技術庁放射線医学総合研究所(放医研)に移った翌年、1998年に有馬先生は文部大臣に就任され、翌年には科学技術庁長官を兼務されました。この頃街中で偶然先生にお目にかかったことがあります。家内と共に向島に向き、隅田川七福神回りの後名物草餅を求めようとしている時、交差点に有

馬先生が数人の護衛と立ち止まっておられました。休日にもかかわらず何かの公務についておられたのだと思います。思わず飛び出してご挨拶をしました。ボディガードに咎められてもおかしくない状況でした。

放医研時代にも有馬大臣にご心配をおかけしました。放医研研究者が原子力発電所周辺住民への低線量放射線健康影響の疫学調査結果を発表していましたが、影響がないという主旨の論文のデータを用いて、悪性リンパ腫が増えるという結論を導き学術誌のレターに載せた外国人研究者がいました。日本の週刊誌記者がこれを見付けて重視した結果、国会の科学技術委員会で科技庁長官が質問を受けました。所長であった筆者が長官に説明に伺いました。既に退職していた研究者に代わって、現役の疫学者が再調査をして論文発表することで一応終息しましたが、有馬先生はこの後再調査の進捗を気にかけておられ、何度かご報告に伺いました。ご心配をかけて忸怩たる思いでした。「彼は大丈夫だよ」と有馬大臣が評されたと風の便りに聞き、東大時代の成果を認めて下さっていたのかと密かに嬉しく感じていました。有馬先生は日本の学術・研究の振興と国際化に尽力され、多大の貢献をされました。国立大学法人化を推進され、沖縄科学技術大学院大学(OIST)を設立し、理事、評議員を務められました。

2008年6月筆者は社団法人日本アイソトープ協会(JRIA)常務理事に就任し、直接先生にお仕えする立場になりました。この時有馬先生は武蔵学園学園長でしたが、JRIA会長を兼務しておられました。毎月開催される役員会に出席される有馬先生は、少し早く到着されると近隣を散歩されました。健康管理の一環であったと思いますが、句作の機会でもあったかもしれません。役員会では適時的確な指示を出され、日常の運営に当たる常務理事や部長達を鼓舞されました。有馬先生はJRIA職員が研究活動にも従事する環境を作り、研究成果を上げる必要があると繰り返し主張されました。川崎市殿町に研究所が新設されたのは有馬先生のご指導の成果であると推察します。JRIAで難問が生じる度に常務理事が解決策を考え、有馬会長の決裁を仰ぎました。武蔵大学学長室にお訪ねすることもありました。先生はいつも適切なお助言と惜しみないご支援を下さいました。

2006年12月に制定された公益法人制度改革関連3法の施行（2008年12月）に向けて、「民間が担う公共」を目指して申請準備をしていました。将来の放射性廃棄物最終処分に備えて積み立てる資金の扱いが最難関の課題でした。ようやく認可されて、2012年4月に公益社団法人に移行し、6月に筆者は退任しました。間もなく有馬会長は、最大の課題であった、古い放射性廃棄物の帰属問題を解決されました。日本原子力研究開発機構（JAEA）理事長とのトップ会談が行われたのですが、有馬先生でなければ円滑な話し合いは困難であったと想像されます。

毎年年末にJRIAの新旧役員や部会長、職員らが集まり懇親会を持ちます。有馬先生の会長挨拶は聴衆の笑いを誘いながら、いつも役職員を元気づけるものでした。加えて、教育、人材養成の重要性をいつも強調されました。

突然に有馬会長を失った日本アイソトープ協会の悲嘆と混迷は想像に難くありません。後に残る役員（副会長、専務・常務・専任・非常勤理事、監事）と職員が一丸となってこの危機を切り抜けることを切に願っています。

有馬朗人先生の学術・教育・政治・社会・文化への比類なきご貢献を称え、ご生前に公私にわたりご指導いただいたことを感謝しつつご冥福をお祈り申し上げます。

物理学者としての有馬先生

(株)千代田テクノロ大洗研究所
柴田 徳思 (Shibata Tokushi)

有馬先生は原子核理論の専門家で、多くの重要なお仕事をなされました。筆者がその全容を理解している訳ではありませんが、以下にその一部を簡単に説明します。筆者は40代の半ばまでは原子核実験に携わっていましたが、その後J-PARCの放射線対策に携わってきました。原子核理論について専門的に学んではないので、筆者の理解が間違っているかも知れないことをお断りしておきます。

原子核は陽子と中性子から成る多体系です。原子核模型の場合は原子核と電子の間に働くクーロン力で電子の運動を記述できます。電子はK-殻、M-殻、

L-殻…と殻構造を形成します。各殻が満杯になると化学的に不活性なHe, Ne, Ar等の希ガスが現れます。一方、核子間に働く核力は短距離力なので原子の模型とは大きく異なります。しかし、核子は、電子と同じように、1つのエネルギー状態に1つの核子しか入ることはできません（核子のスピンは1/2でスピンの上下でエネルギーが異なるので、1つの軌道に2個の核子が入ります。原子内の電子でも同じことです）。このため原子の場合のようにエネルギーの低い状態から順々に詰まっていくので、殻構造を形成し、殻が満杯になる核子数のところで特徴ある原子核を生じます。この核子数を魔法数と言います。メイヤーとイエンゼンは核内で軌道角運動量とスピンの結合で生じる力により魔法数が説明できる核模型を示し、ノーベル賞を受賞しています。魔法数の原子核に核子が1つ加わった状態は、魔法数以下の原子核が作る場の中の1つの核子の運動として記述できます。このような模型は単一粒子模型と言われ、原子核の磁気モーメントの実験値とこの模型を用いて計算した磁気モーメントは比較的よく合いますが魔法数に加わる核子数が増えると、実験値とは合わなくなります。メイヤーとイエンゼンにより提唱されたばかりの単一粒子模型に有馬・堀江の配位混合を取り入れると実験値をよく説明できることを示しました。磁気モーメントだけでなく、励起状態のエネルギー、スピン、パリティについても再現性が良くなり原子核の理解を大きく前進させました。

原子核の運動には単一粒子模型で説明できる運動と原子核全体が振動や回転により生じる集団運動状態が現れます。原子核が球形の場合には表面の振動が現れ、変形した核では回転運動が現れます。球形核の振動と変形核の回転運動は別のものと考えられていた当時、元東京大学原子核研究所長の坂井光夫先生は多くの実験結果を整理して、振動運動と回転運動は連続的につながっているというクエサイバンドという考え方を提唱しました。

球形核の振動では角運動量が2の振動が起こりません。振動が1個ならあるエネルギーのところに励起準位が現れます。この振動が2個重なると2倍のエネルギーのところに角運動量2が2個なので、角運動量が0, 2, 4の励起状態が現れます。角運動量が2の振動はdボゾンが1個という記述ができます。

有馬先生は坂井先生との議論の末に、クエサイバンドには奇数の角運動量が現れるので、 d ボゾンと s ボゾンでクエサイバンドを説明できることを示されました。 d ボゾンのエネルギーを ε とし、ボゾン間に働く四重極相互作用を $kQ \cdot Q$ とし、 $\varepsilon \neq 0$ で $k=0$ とすると振動状態が現れ、 $\varepsilon=0$ で $k \neq 0$ とすると回転状態が現れる。 $\varepsilon \neq 0$ で k を少しずつ大きくすると振動状態が回転状態に移ることを示し、クエサイバンドは相互作用するボゾンという模型で説明できることを有馬先生は示されました。この相互作用するボゾン模型は原子核の集団運動に関する理解に大きく貢献しています。

ここで述べたものは有馬先生のなされたお仕事の一部ですが、実験家を含めて多くの研究者に有益な知識を与えた偉大な研究者でした。

有馬朗人先生を偲んで

前日本アイソトープ協会 専務理事

山下 孝 (Yamashita Takashi)

死は時に突然訪れます。有馬朗人アイソトープ協会会長急逝の報は、夕方のニュースで聞きました。2年前に、有馬先生は体調を崩され、歩くのが少し遅くなっていましたので、RI協会専務理事として、筆者は会長に、RI協会会長をあと3年継続していただけるか、伺いました。有馬先生から「大丈夫ですよ。やりましょう。」との快諾をいただき、安堵しました。当時は、毎日8,000歩の散歩をしていたためか、足取りも軽くなられているご様子でした。

さて、筆者は、8年前に協会のお世話になるまで俳人としての有馬先生を存じ上げませんでした。協会に勤め始めて、会長の有馬朗人先生は句会を主宰していると聞き、筆者の出身大学の同級生5人と一緒に俳句を見ていただけることになりました。俳句を見ていただいてしばらくたって、たまたま本屋で、一声を出して味わう「日本の名俳句100選」監修金子兜太(中経出版)を読んでいたたら、有馬先生の句「鳥帰る空に積み上げ無縁仏」とあるので驚きました。俳句400年の歴史の中から選ばれた100人の俳人の中には、芭蕉、蕪村、子規、虚子らも入っているのですから、俳人有馬朗人に師事できる幸せを他の5人の仲間と分かち合いました。



2017年6月 川崎技術開発センター開所式にて(右から有馬先生、久保敦司副会長、山下孝前専務理事)

有馬先生から選句する基準をお聞きすることはなかったのですが、筆者の印象では、発明発見を目指す物理科学者らしく、自然を詠いながら読む人が共感を得る「発見」を大切にしていたのかと思います。俳句の世界も、「新しい発見」が大切であることは科学の世界と変わらないのでしょうか。また、先生の俳句は何時でもどこでも俳句を作れるという点では、生活即俳道でしょうか。お勤めいただいた会長としての当協会運営は、自然と同じように、調和のとれた状態であることを願っていたような気がします。深く感謝しております。

筆者が持ち歩いている角川学芸出版の「季寄せ」から有馬先生の句を2句と先生の句集「黙示」から1句それぞれ選ばせていただきます。

天狼やアインシュタインの世紀果つ

珈琲の渦を見ている寅彦忌

つづれさせこの世をのぞく窓を閉づ

毎月、筆者達の駄作をたくさん見ていただき有難うございました。もう少し、見ていただきたかったのですが、仕方ありません。これからは先生の提唱する「自らの詩心を楽ませ、生きる力を得ることのできる作句活動」を続けて参ります。どうぞ安らかに休みください。

湯煙や天高く行け太閤橋 たかし 合掌

有馬先生を偲んで

星薬科大学学長・東京大学名誉教授／特任教授・内閣府原子力委員会委員

中西 友子 (Tomoko M. Nakanishi)

筆者が有馬先生と最初にお会いしたのは、今から30年以上も前、有馬先生がまだ東大の理学部長をされていた時でした。当時、東大の原子力総合センターにかなり月日の経過したタンデム加速器があり、いかに更新するかも含め、加速器質量分析の将来像を取り仕切っておられました。その委員会の委員長としての素晴らしいリーダーシップに圧倒されたことをよく覚えております。その後、筆者がもともと放射化学を専攻していたことから放射化学会でお会いする機会が多々ありました。1997年の熊本での放射化学会では、夜の散歩にお供をしたのですが、途中で急に立ち止まり、熊本城を背に、放射線やアイソトープを利用する研究は非常に大切なので、他のことは気にせず、心して研究を進めるようにと筆者に力説してくださったことはとても印象に残っています。先生の真理探究という基礎研究にかけると並々ならぬ意気込みを感じた次第です。

その後、有馬先生は文部大臣をはじめとても忙しくなられたのですが、科学技術館の館長になられた頃からまた頻繁にお会いする機会に恵まれました。大学が法人化を迎える前後に筆者が東大の総長補佐をしていたころは、原子力分野へのご心配をかなり熱く語られ、どのように組織やガバナンスを考えるかについてご教示いただきました。無事法人化を迎え、筆者は全学の環境安全本部長となり、原子力やアイソトープ関連分野がひとつの大きな課題となった際には、いかに研究を活性化させながら規制を考えていくかについても教えていただきました。組織のことを考える際には現場からの情報が第一であると言われ、いつも時間がある際には実際に出かけられて色々な方と話される先生ならではのアドバイスだと思いました。有馬先生はどんな立場におられても現場を忘れない、この考え方は筆者が後に福島原発事故後に農学部の教員をまとめ、調査研究を進める際にとても役に立ちました。現場に踏み込んでいかなければ質の高い情報や調査ができなかったからです。

筆者は東大農学部のアイソトープ施設でいかに施設を整備してアイソトープを使った研究を推進させることができるのかについても考えてまいりましたが、この点についても色々ご教示いただきました。有馬先生が、常々、アイソトープや放射線利用の教育の重要性を言われていたこともあり、東大農学部では、アイソトープ利用で義務化されている教育の中に、研究でアイソトープをどう利用できるのか、何が利点なのかを入れ込みました。また福島原発事故後からは東大農学部の大学院教育組織内に放射線関連のグループを立ち上げ、農学のみならず他の学部の学生の教育も続けております。これらの活動ができたことは時折お会いして色々お話を伺ってきた有馬先生のお陰だと深く感謝しております。

有馬先生は国際的なアイソトープ研究の発信も非常に大切していただかれ、特に中国との関係をいかに深堀するかについて心を砕いていただきました。中国との賢人会議も何回か開催され、筆者も参加させていただきましたが、その際の先生のスタンスは、科学技術の発展で例えば環境問題では負の影響を出すことがあったけれども、その科学技術を使っただけで環境問題をクリアしてきたのか、つまり科学技術をどのように発展させるかが鍵であると発表されていました。これは福島原発事故前でしたが、科学技術の進歩の方向性、特に放射線がいかに寄与できるかも含めて話をされました。

筆者は日本アイソトープ協会と色々関わってまいりましたので、有馬先生が日本アイソトープ協会の会長になられてからは、自宅や大学からの距離が近かったこともあり、お会いして研究・教育について、また最新の科学技術状況も含め、色々ご教示いただ



2010年10月CJK Congress2010の懇親会にて（北京）
左は講演発表者の中西氏

く機会が多くありました。

有馬先生からいつもご教示を受けておりました筆者としましては、まだ十分なお返しもできていない中、突然の先生のご逝去を知り、大変残念でなりません。謹んでご冥福をお祈りいたします。

有馬朗人先生を悼んで

(公社)日本アイソトープ協会 副会長
久保 敦司 (Kubo Atsushi)

12月7日の夕刻、「有馬朗人先生が亡くなられた」と読売新聞社と日本アイソトープ協会の総務課から、それぞれのファックスで突然知らされた。1か月に1度開催される、協会の常任役員会にて有馬先生は議長を務められているが、前月の11月27日も普段と変わりなくお元気に20分前には席に着かれた。当日は、朝食前の日課といわれる、近所の公園周りを5千歩ほど散歩してきたと、にこやかに話されていたので、あまりにも突然のご逝去に言葉を失い、実に痛恨に堪えない。

有馬先生は2008(平成20)年に会長に就任され、12年7か月の永き間、トップとして協会をリードしてこられた。協会の事業は医療、工業、農業、研究等様々な分野へのアイソトープの供給とその廃棄物の回収・廃棄までの一貫管理、また利用を促進するためアイソトープに関する知識、技術の普及及び啓発等と多岐にわたっているが、有馬先生が最近心配なさっていたことは、日本におけるアイソトープ利用の減少であった。その要因はアイソトープや放射線に対する国民全体の過度の恐怖心のためではないか、言い換えれば、アイソトープや放射線に関する正しい知識の啓発不足、それはつまり小中学校の子供からの理科教育の見直しの必要性ではないかと強調され、それは国民の生活を支えるアイソトープの利用・普及を推進する協会の大事な役割ではないかと明言されていた。

小生は、2014年から副会長として有馬会長の傍らで働かせていただいたが、協会は有馬会長の力強いリーダーシップにより2018年1月から川崎技術開発センターを稼働させる等、事業の拡充を図ってきた。更に将来の発展のため新規事業を具体化しつつある。これからは協会役員、職員一同が協力して、



2017年7月 第54回アイソトープ・放射線研究発表会にて(オープンセミナーでの講演)

有馬先生のご遺志を継いでこれら諸事業を推進してまいる決意である。それによって先生に報いることをここにお誓い申し上げ、衷心よりご冥福をお祈りいたします。

有馬朗人先生のこと

(公社)日本アイソトープ協会 専務理事
畑澤 順 (Hatazawa Jun)

有馬先生は2020年11月27日(ご逝去の9日前)、協会本部2階第3会議室で開催された常任役員会に出席され、議長を務められました。本部再開発に伴う案件が審議された際、最後に「遠距離通勤になるかもしれない職員の方々に充分配慮するようにしてください。」と申されました。先生の明るく穏やかで闊達なお声やお姿に接することはもうできません。

1994年2月に広島県宮島で脳科学の国際シンポジウムがあり、先生は特別講演の講師として出席されていました。最終日の午後、4人乗りの宮島ロープウェイに奥様と共に同乗、弥山に登りました。冬の瀬戸内の晴天の日、仲睦まじく楽しそうにしておられました。

2012年の師走、大阪大学吹田キャンパス近くの小野原食堂で昼食をご一緒する機会がありました。先生は大根おろしたっぷりのサンマ定食(450円)、食べ終わるとポケットからラップを取り出し、少し残したご飯でおにぎりを作りはじめました。「帰りの新幹線で晩ご飯にするんですよ。」と笑ってポケットにしまわれました。つぶれてしまわないか心配したものです。

2014年の第54回日本核医学会学術総会の特別講演をお願いしたところ、快く引き受けていただきました。江古田の武蔵大学を2度お訪ねし、講演の内容等を相談しました。桜満開の頃（2013年3月）と冬晴れの寒い日（2014年1月）でした。話題は科学と芸術の間を縦横無尽に行き交い、至福の時を過ごしました。西洋の芸術は対称性を大事にすること、それが東方にくると対称性が薄れてくること、日本人には対称性とは異質なものを尊ぶ心性があること、そのような異質の心性が「対称性のやぶれ」の発見につながったのかもしれない、等。科学も芸術もヒトのなす業です。科学する心と芸術の心は奥深いところで繋がっているのかもしれない。

2014年11月の特別講演前日にはお1人で大阪入りなさいました。中之島のリーガロイヤルホテルがお気に入り、宿泊したときには堂島川沿いを散歩するのが楽しみだったそうです。お生まれが大阪市住吉区ですからリラックスできたのかもしれない。講演が終わってお帰りになる際、黒いダウンジャケットがないのに気づきました。大会実行委員長と有馬先生は2人で探し回り、ようやく発見。「あとは1人で大丈夫、大丈夫」と手を振り、次の講演会場（松山）に向かわれたそうです。

最後まで、協会の職員が行く末を案じておられた先生。残念です。

心からご冥福をお祈りいたします。

有馬先生を偲んで

(公社)日本アイソトープ協会 常務理事 / *Isotope News* 編集委員長

上 蓑 義朋 (Uwamino Yoshitomo)

有馬先生が2020年12月6日に急逝された。前月の27日に開かれた協会の役員会を元気に取り仕切っておられたので、驚くと同時に、何とも残念であった。

初めて有馬先生を拝見したのは、30数年前に当時の東京大学原子核研究所で開かれた職員向けの講演会であった。打ち解けたご様子だったのを覚えているが、今調べると1956年から3年間、研究所の助手をされていたとあり、古巣でのご講演ということで納得した。講演会では映画を披露された。2本

のスリットに電子を通してスクリーンに衝突した位置を点で記録すると、片方を隠すとどうということはないが、両方開けたときには、点の多い所と少ない所がだんだんに縞模様になってくのがわかり、量子力学を目で理解したつもりになってわくわくしたことを鮮明に覚えている。

その後私は理化学研究所に移籍した。先生は半年前から理事長としておられ、採用の辞令を理事長室で直接いただいた。先生は研究を支える事務系（安全管理室も含まれていた）の職員を大切にされ、ポケットマネーで池袋のホテルに幹部職員を招待してください（採用直後の私も幹部もどきとして入れるほど敷居が低かったので大勢いた）、おいしく飲食しながら奥様も交えて親しく懇談させていただいた。毎年仕事納めの夕方には、事務系の各部署にワインの瓶を配って回られていた。いただいた方は自然と出る満面の笑顔で「ま、先生も一杯」と日本酒を差し出すと、「いや私は飲まない」と言われ、秘書さんが「では私が」とお酌を受けていた。年明けの仕事始めのご挨拶はいつも「健康第一」で締められ、研究系、事務系が両輪で協力して成果を出すことが大切と説かれていた。

先生は任期途中の5年目で理事長を辞めて国会議員になられ、すぐに文部大臣に就任された。ここでも国民、特に若い方への放射線教育に力を注がれ、文部省の講堂で小学生を相手に講演された。放射線は簡単に測れることを見せたいとのことで、理化学研究所に依頼があり、私がサーベイメータを持ってお手伝いに行った。文部省で用意してくださった白衣を着て、先生の横でお手伝いさせていただいた。大臣が子供に科学講演をする現場に立ち会えたことが嬉しく、翌日同僚からニュースにちらっと映った顔に表れていたと言われたのを思い出す。その後一般の方へのご講演では講義スライドの準備もお手伝いさせていただき、当日もサーベイメータをお渡ししたりした。その時、線源がないのに α 線サーベイメータがピッと鳴り、先生は「実験は失敗することもある」と言われた。当時の私では十分な知識がなく、「空気中のラドンです」とフォローできなかったのが心残りである。しかし先生は私を覚えてくださり、その後協会の理事会で20年ぶりにお会いした際には親しく声をかけてくださった。

有馬先生は俳句、物理学、政治という常人ではあ

りえない広い分野で、最高の立場に上られ最高のお仕事をなされたが、最近でも「放射線教育を何とかしたい」と言っておられた。先生としてはやり残した仕事が多々あるのかもしれない。しかし、太く、長く生きられ、また閉じ方もご立派だったのはさすがと思う。燕雀が鴻鵠を偲ぶのはおこがましいが、感謝の気持ちを何か表したいと思わせる方であった。ご冥福をお祈りしたい。

有馬朗人先生を偲んで

アルファ・タウ・メディカル株式会社 / 前 *Isotope News* 編集委員長

二ツ川 章二 (Futatsukawa Shoji)

「はやぶさ2」が約6年間、52億kmに及ぶ旅から帰還しカプセルを地上に届けた翌日、巨星、有馬会長がお亡くなりになりました。

有馬会長には、前吉川会長が産業総合研究所理事長との兼務の解消のため会長を辞任された後の会長をお引き受けいただき、2008年から12年7か月間、当協会の事業運営をけん引していただきました。この期間は当協会の大きな転換の時期でした。明治以来となる公益法人制度改革における公益社団法人の認定取得、原子力機構へ処理委託したRI廃棄物の帰属問題の解消、協会設立以来の老朽化したRI施設の川崎市キングスカイフロント移転等が実施され、有馬会長には新しい公益社団法人日本アイソトープ協会の創始者としての役割を果たしていただきました。

当協会は他の団体とは異なり、経営を担う理事は他の組織の出身者であり、協会プロパーからの門は閉ざされていました。有馬会長は、そのようなびつな組織ではいけない、協会出身者が経営を担う理事に登用されなければ健全な組織運営はできないと、絶えず職員の中を押してくださいました。職員の意識改革が追い付かず有馬会長のご意向に応えきれないことは、誠に遺憾に思っています。

同時に、当協会の事業推進において、いつも職員の役割の重要性と活躍に期待をしていただきました。新年、新年度等節目には、全職員が会議室に集まり会長からご挨拶をいただきます。恒例の職員を前にしてのお話では、まず、職員自身と家族の健康

のことを労い、良い仕事をするためにしっかり生活基盤を確立することを強調されました。

2011年3月に発生した東電福島第一原発事故に対して当協会は、電話相談、放射線測定器取扱講習会の開催、自治体等が開催する講演会への講師派遣等様々な活動を展開しました。有馬会長は、当協会は国民の身近なRI利用に携わるRI・放射線の専門家として、国民の皆さんに安心していただくために、正しい知識を提供する役割があるとおっしゃられ、私たちの活動を評価してくださいました。また、国民に放射線・アイソトープを正しく理解していただくには、知識を得ていただくための教育、特に小・中・高等学校の若年層への教育が必要である。教育におけるRI・放射線利用、放射線安全の分野での当協会の役割は大きいと強調されていました。

2014年、協会の最初の社内報に恐れ多くも俳人有馬会長から句を作っていただきました。

「生き生きと 火の島生まれ 初日の出」

2013年11月小笠原諸島に誕生した新島が隣接する西の島につながった翌年の句です。「わかりきったことではあるが、自然の力は驚くべきものである。突然海の底から噴火が始まったと思っていると新しい島が生まれた。そして前からあった島と結合した。この新島が生まれたとき、将来大きな火山島となり、初日の出の中で火を吹き上げる美しい姿を想像して、この句を作った。自然界で起こる生成流転への賛歌である。」との説明がつけられていました。本年創立70年を迎え、これから創立100年に向かって進んでいこうとするアイソトープ協会にとってなんと励まされる句なのだろうと感じています。

有馬会長に残していただいた足跡をしっかり踏みしめ、当協会が直実に未来に向かって前進することを当協会すべての関係者が誓います。有馬会長、本当にありがとうございました。ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

China Isotope & Radiation Association (CIRA)

President

Lei Zengguang

It was learned that President Akito Arima passed away

on Sunday, December 6, 2020, at the age of 90.

As Japanese nuclear physicist (known for the interacting boson model) and former education minister, also the former president of the University of Tokyo, he made outstanding contributions in related fields all his life. On top of many awards he received in Japan for his achievement in nuclear physics, President Akito Arima was given France's highest order of merit, Legion of Honor. His achievements have been recognized all over the world.

President Akito Arima vigorously promoted the exchange and cooperation between Japan and China in the field of Nuclear physics, and contributed greatly to the promotion and development of Nuclear physics in China.

As the President of Japan Radioisotope Association (JRIA), Dr. Akito Arima visited China Isotope & Radiation Association (CIRA) many times and actively promoted the exchange and cooperation between JRIA and CIRA. Also, he made great contributions to the CJK cooperation, promoted the signing of cooperation agreements between China, Japan and Korea.

On behalf of CIRA, I would like to express my deep appreciation for his contribution to the cooperation between Japan and China, and express my deep condolences on his passing.

Sincerely yours,

Korean Association for Radiation Application (KARA)

President

KyungIl Jung

When we heard that of Dr. Akito Arima, the President of the Japan Radioisotope Association had passed away we felt a great sense of loss. On behalf of the Korean Association for Radiation Application (KARA), representing more than 500 RI related enterprises in Korea, I would like to express my deepest condolences to his bereaved family through you. We want to let you know that we have our greatest sympathy. Our hearts are truly saddened.

Dr. Akito Arima was more than just a truly wonderful and highly well-known gentleman nationally and internationally; he was the president of Tokyo University from 1989 to 1993, the Minister of Education in Japan from 1998 to 1999, the president of RIKEN from 1993 to 1998, and most recently he had been the president of JRIA from 2008 to 2020. He also received many awards and honors such as the Bonner Prize of the American Physical Society (1993), a Grand Officer of the Legion of Honor (1998), an Honorary Knight Commander of the Order of the British Empire (KBE) (2002), the Order of Culture (2010) among others. In particular, as president at the JRIA, he recently hosted the CJK Meeting in Tokyo in 2018, and signed the Agreement for Cooperation among KARA, CIRA, and JRIA to strengthen and develop the friendly relations and cooperation among the three representative countries.

Accordingly, at this time, we know that his passing will not only leave a void in our lives, but in the hearts of all those who knew him. Our community has lost a valued person and a supporter of our international scientific efforts. His friendly presence will be greatly missed. Our deepest condolences go to his family members and his friends.

If there is anything that we can do to help you in anyway, please do not hesitate to contact us at any time.

Our sincere thoughts and prayers are with you.

Sincerely yours,



2010年10月 CJK Congress 2010(北京)にて。左から有馬先生、当時のCIRA・Wang副会長、KRIA(現・KARA)・Lee会長